

星の夜の深きあはれを今宵知りぬる

月をこそ眺め慣れしか

星の夜の深きあはれを今宵知りぬる

これは、「星夜賛美の女性歌人」として顕彰されている『建礼門院右京太夫（平清盛の娘で高倉天皇の皇后（中宮）となった建礼門院に仕えたことがある歌人）』が詠った和歌である。この和歌を詠んだ背景を、右京太夫は「十二月朔日頃なりしやらむ、夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、むら雲さわがしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり。引き被きふしたる衣を、更けぬるほど、丑二つばかりにやと思ふほどに引き退けて、空を見上げたれば、ことに晴れて浅葱色なるに、光ことごとしき星の大きなる、むらなく出でたる、なのめならずおもしろくて、花の紙に箔をうち散らしたるよう似たり。今宵はじめて見初めたる心ちす。」と『建礼門院右京太夫集』に記している。

意識すれば、

「宵のうちは雨雲雪雲が覆って星なども見えず、加えて寒くもあったので寝所に入って寝てしまったのだが、夜中にふと目覚めてしまい起きだして見上げた空は、それまでの曇りがちのものとは違い、すっかり晴れ上がっており、光り輝く星が一面に広がる星空で、あたかも「花の紙に箔をうち散らしたるよう」であった。これまでも星月夜は幾度も見慣れていたつもりであるが、星空というものが人の心にこよなく感動を与える事象であることを改めて感じ入ったものである。」

ということになるであろうか。

つまり、美しい自然の風景や、それを重んじて叙景・抒情する楽しみ、つまり風流の対象である花鳥風月という四字熟語で表現されてきた日本独自の美の対象に、これまで含まれていなかった「星夜」を新たに見直した思いだと右京太夫は綴ったのである。

この思いは、本稿筆者が経験した或るきっかけから。夜な夜な星空を眺めたり、撮影し星と星を結んで星座を形作ったりし始めたことが余生の楽しみになったことと相通じ「いとおかし」と感動したものである。

本稿筆者の或る経験とは、伊能忠敬（江戸時代の中後期における最先端科学であった天文暦学を学び始め、その天文学の知見を活用しておこなった全国測量によって精密な日本地図を完成させた偉人）の事蹟に関する調査研究をシニアになってから始めた過程で、それまでの伊能忠敬研究分野では殆ど俎上に上らなかった天体観測に係る史料（観測データと当時の星図）に接触する機会に恵まれ、その史料の調査の結果、当時と現在の星の名称の比定や観測時刻及び観測値からの緯度の導き方などの解明に成功したことである。そのことが契機となって、それまで無知であった星座や星の名称などに詳しくなり、結局、夜な夜な星座を眺めたり撮影したりする楽しみを持つに至ったという次第である。

そこで、右京太夫が図らずも目覚めて見ることになった星空にむらなく光っていた大きなる星とは、具体的になんという名前の星々であったかを知りたくなったのである。

右京太夫が星の夜の深きあはれを知ったのが、十二月朔日の夜が更けて丑二つばかりの頃とのことであった。その十二月とは、平家が壇ノ浦の戦いで滅亡したことによって、大原に隠棲した建礼門院の変わり果てた姿を目の当たりにした後に、右京太夫が比叡坂本への旅に出たときである、とのことから、その十二月朔日とは、元暦二年(1185/12/24)に当たることになり、その日の丑の刻と言え、翌日の未明の午前二時頃にあたる。

そこで、パソコンのプラネタリウム・アプリを使ってその時刻の夜空を再現してみたところ、それはまさしく、以下に掲載した文部省唱歌「冬の星座」の歌詞（堀内敬三作詞）の表現した夜空と同じものであったのである。

木枯らしとだえて さゆる空より
地上に降りしく 奇しき光よ
ものみな憩える しじまの中に
きらめき揺れつつ 星座はめぐる
ほのぼの明かりて 流るる銀河
オリオン舞い立ち スバルはさざめく
無窮をゆびさす 北斗の針と
きらめき揺れつつ 星座はめぐる

すなわち、元暦二年十二月朔日の深夜から未明にかけて見える星々（括弧内は、当時の名称）は
西の空には、昴、おうし座アルデバラン（畢宿五）、ぎょしゃ座カペラ（五車二）、オリオン（参宿）、おおいぬ座シリウス（天狼）、
南の地平線へは、銀河が流れ落ち
天頂付近にはふたご座（井宿）、北斗七星（天枢、玉衡、開陽、搖光）、しし座（軒轅）、
東の空には、うしかい座アルクトウルス（大角）、おとめ座スピカ（角宿一）等。

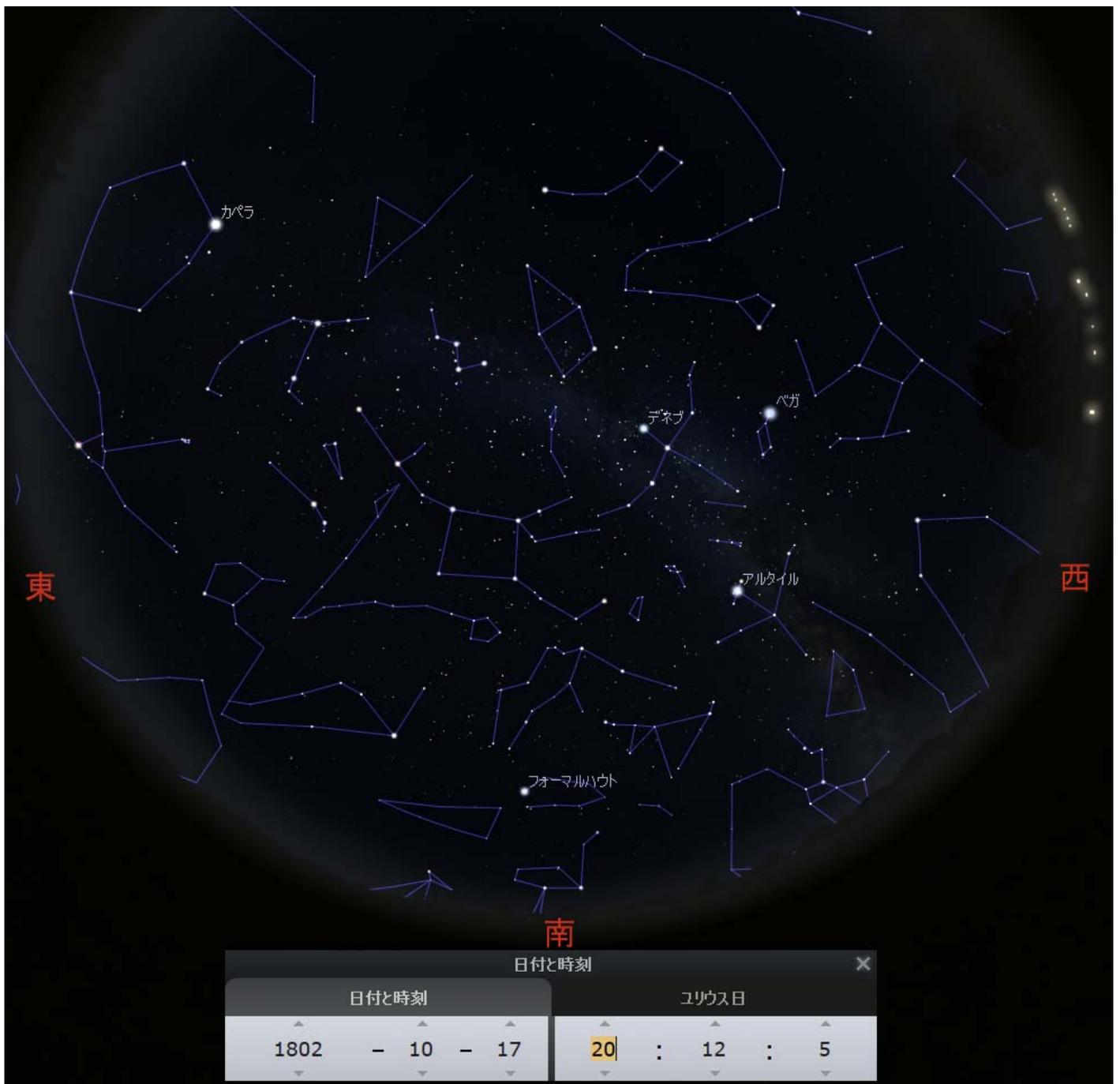


実は未明であるからこそ“花の紙に箔をうち散らしたるよう似たり”の様相を呈していたのであり、右京太夫ならずとも“星の夜の深きあはれ”に浸れる様相であったのである。

そのような星の夜に魅せられたのが、子供の頃、九十九里浜に設けられていた実家の漁具小屋の留守番をしていた孤児の伊能忠敬でもあったのであり、後年、その伊能忠敬の天体観測作業を見学した宿舎の主人も星の夜の観測作業の熱意に感動のあまり、和歌を以ってその感動を吐露してもいた。

すなわち、享和二年九月廿一日(1802/10/17)、伊能測量隊は、越後の国岩船町に九ツ半頃、町年寄りの伴田与惣座左門宅に着き、一休みしたのち夜間に予定している天体観測に備えて、測器(子午線儀{測量地点と北極(子)と南極(午)とを結ぶ半円の線[子午線]に糸が重なっているもの)、象限儀(恒星の地平線からの高度を測るもの)の据え付け作業に着手して夜を待った。

測量公務の作業日誌によれば「此夜度々雨、夜亦曇」とあるから、“晴れて浅葱色”だった右京太夫の場合とは違っていただようである。そのようなはっきりしない天候を憂えていた宿の主(伯寛)は、次の和歌を謡うことで測量の成就を祈ったのであった。



寿の星を南の空清く

雲吹き払え秋の小夜風

宿主の願いが天に届いたのか、あるいは、どうしてもその地の緯度把握は決して省略しないのだという執拗なまでの伊能忠敬の測量に取り組む姿勢に天意が折れたのか、作業日誌によれば「少測」とあるから、雲が流れて星が見えるのを執拗に待つことで観測をやり遂げることができたようである。

そこで、当日の測量データを調べてみたところ、「少測」どころではなく、秋の星座であるみずがめ座やペガサス座に属す星々を夕方六時半頃に三個（天津四、瓠瓜二、女宿一）、その後はしばらく雲にさえぎられて中断した後の七時半頃にみずがめ座の星一個（虚宿一）、八時の時間帯では、みずがめ座の星（危宿一、墳墓一、二、三、四、羽林軍廿六）やペガサス座の星（危宿二、離宮四、一、二）、再び曇りで一時間ほど中断後の十時頃にペガサス座の星一個（室宿一）、都合、合計一十五個も測っていた。

このように曇り空という観測条件的には難しい状況にあっても観測を省略することなく、何とんでもなく宿泊地が地球表面の何処に位置しているかを示す緯度については、天体観測によって欠かさずに求め、実際の日本列島と完ぺきに相似形の日本列島の地図を世界地図の上に描くのだ！という強い使命感を伊能忠敬が抱いて全国を測量したのだということが分かる。

伊能測量隊に宿を提供したここ岩船の宿主（伯寛）もその使命感を感じたのであろうか、更に一首の和歌を詠んだのであった。

爛(あざ)やかに影見る星ともろ共に

この郷の名も世々に曇らじ

万葉集で「敷島の大和の国は、言霊の幸はふ国ぞ、ま幸くありこそ」と柿本人麻呂が謡っているように、人の願いや気持ちを和歌として表現することによってその願いや気持ちを叶えようとしたように、この岩船という郷の名、測った星の名と測量データとそのデータから計算して得られたその地の緯度は、伊能図の上に、大日本沿海実測録に、そして北極高度測量記にそれぞれ記録されて香取市の伊能忠敬記念館に保管され、それらの史料は二世紀をへた今日、国宝にもなってしまったのであった。

そのことに感動した筆者の一首。

真砂なす星屑覆う冬の空

無窮の果てに届けと祈る

参考文献

- ・建礼門院右京大夫集 日本古典文学全集
- ・伊能忠敬測量日記 伊能勘解由著
- ・北極高度測量記 伊能勘解由著
- ・大方星図 伊能忠誨著